

3871 地球のかおり：「光明の道標」(産経新聞)・心模様

危険の囁き、予感。足元の道筋が危うくなってきている。

雲行が怪しい。道なき道に踏み込んだようだ。

夏のドイツアルプス。1日仕事だが、宿から、軽い気持ちでトレッキングを開始。

いつものように綿密な計画は立てていない。

まだ見ぬ光景を求めて、ひとり行脚、直感のさまようトレッキング。

先入観を持たない面白さ。一期一会の出会い。どこをどう歩いてきたのか。

いささか記憶が危なっかしくなっている。

地球ひとり行脚。天候の急変は、常に恐ろしい。ガスが出てきた。

お天気が良ければ視界は良いのだが…

風も少し出てきている。というより、強くなって来ている。

スコールでも来るのか。雲の流れも速くなって来た。

黒い雲も見える。少し言葉使いが悪いが、やばい状況。おおざっぱな目的地しかない。

このまま進むべきか、戻るべきか。これまでのひとり行脚の経験上、確かなものがあるとしたら、

その時の自分自身の体調と積み重ねた経験と判断力。

いや理屈でなく、直感かもしれない。選択と決断。素早いフットワークしかない。

そんなはずではなかったは、通じない。待ったなし。言い訳なし。後悔なし。

この作品の状況下は、視界が全く閉ざされた状況ではない。

どこか頂に登って、ポジションが確認できれば有難い。しかし、大きく逸れるのは危険。

ここは海外、ドイツアルプスは、未知への挑戦。

天候が良くなる状況ではなさそう。冬ではない、夏という思いがある。

少しは、お天気情報も得て来ているものの、あてになって、当てにならない。

標高 1.000 メートルごとに、状況は変わる。地形も違う。正確に予報するのは難しい事。

未知への挑戦、大変だが実に面白い。その魅力から引き返せない。

前方に大きな十字架が見えた。道標なのか。教会があるのか。天候が急変。

最悪を想定。天国への階段。私の脳裏に走ったのは、やばいという勘。

体験上、ヨーロッパアルプスの頂上付近で、十字架や教会をたびたび見かける。
山で遭難する人が多いからかもしれないと想像。

誰か人に遭遇すれば、安心なのだが・・・依頼心は禁物。今ある状況に全力投球するのみ。

山での距離感や到達時間は、予想以上。夏とはいえ、山の上は結構冷えて寒くなるもの。
風が吹けば、体感温度も厳しくなる。近いようで時間もかかる。
険しい足元になると、一步一步慎重に、自分のペースで、呼吸と体調を整える大切さ。
まさに、頼りになるのは自分自身。

天候と体力と距離、時間との相談。すこし下がって上る。
十字架とベンチ、何とも印象強く、場違いだが、目に飛び込んできたので、記録にパチリ。
十字架の形状から判断して、やはり、予想通り教会ではなかった。

想像が広がる。誰が、なぜ、どうして・・・・・・ まだ、心の余裕がある。
帰還の目算もある。それなりの準備も装備もしている。
ともかく、あのベンチまで・・・
何が見えるか、何が見られるかより、腰かけてみたい。
つかの間の時間だったが、心が落ち着いた。何人もの人が座ったのだろう。
視界が良かったら、絶景なのだろう。

今、この文章を、本人が書いている。無事、帰還できた。
その後の話は後日。想像を楽しんで下さい。十字架とベンチとグレーの空模様。
こんな状況下でも、前向きに楽しいイメージを描いて・・・・・・
物語が出来るかも・・・・・・

今、欧州 18 カ国の旅を発信させていただいている。
この旅でも厳しい状況には、何度か遭遇。見事に切り抜けてきている。
自分の置かれている位置と状況の把握。体調は勿論、知恵を絞って考動して対処。
なかなか久楽の文章力では、伝えにくいものの、
欧州 18 カ国の旅の最終章に、もうダメか、遭難？ そんな体験もさせてもらった。
窮地に、冷静に対処。画像記録もしっかり。初めてではない。今は、いい思い出、心の財産。